玄關へ以使者可被差出候、尤御間狹之儀にも有之候間、官位家格等ニ不拘、來掛リ次第、御奏者番家來へ相渡候樣可致候事、和宮樣、天障院樣江獻上物之儀も、檜之間替席において、御留守居謁候筈ニ候事、右之趣可被相觸候事、　同六日、御覺書、年始御太刀馬代、差合等に而後れ獻上之面々、田安殿假御殿御玄關江使者を以差出、御奏者番家來江相渡候之樣可被申渡候、尤差出候日限之義者、御奏者番へ可被承合候、右之趣、萬石以上之面々江可被相達候事、右之通、大目付御目付へ相達候間、可被得其意候事、

〔瀨田問答〕一來午年〇天明六年　元日日蝕なりと承る、公にて御禮有之候哉、いかゞ、

答、來午正月元日日蝕皆既、午の一刻西の方よりかけ初め、午の六刻甚しく、未の二刻南の方に終る、如斯に候得者、御禮明ケ七ツ時より始り、蝕以前退散の事と被存候、

正月元日日蝕の例　元祿五壬申年　未申の時蝕七分半　同十四辛卯年　卯辰の時蝕八分半　享保四己亥年　酉の時蝕二分　明和四丁亥年　未の八刻より申の刻迄

如斯に候、右の內元祿十四年の蝕、御禮刻限に候、其節も蝕終りて辰の中刻より御表江出御、右の外は皆御禮之刻限の外也、右の趣を以相考候得者、蝕の內は迚も出御は無之、來春も蝕以前御禮相濟候樣、未明より御禮始り候事と被存候、

〔要筐辨志一年中行事〕正月元日　但元旦朝蝕之時者刻限早ク出仕、天明六丙午年蝕之時、曉七ツ時前出仕、六ツ時退出、

〔類例略要集〕日蝕ニ付御禮出御有之御刻限

天明六午年正月元日辰刻皆既ニ付、御禮御引上六ツ時、

文政十三寅年正月元日三分辰二刻より巳二刻迄　御禮午后刻

但享保の例を以、去年中暦師共より內伺有之、暦江不載之、諸向都而知者無之、